

## 官営富岡製糸場に関わった 渋沢栄一



近世名士写真其 12

近世名士写真頒布会、昭9至10より

近代日本経済を築き日本資本主義の父と言われる渋沢栄一は、1840(天保11)年、埼玉県深谷市の豪農の家に生まれた。十代より藍玉の製造販売と養蚕の家業を手伝う傍ら、尾高純忠のもとに通い、四書五経や日本外史を学ぶ。尊王攘夷運動に共鳴し、同志と武装蜂起を計画するも頓挫。その後一転して將軍後見職だった一橋慶喜に仕官し、フランスに留学。帰国後の1869(明治2)年、敗者となった幕府に従い、静岡藩で日本最初の「商法会所=株式会社」を設立した。そして優秀な才能により明治政府に仕え、税制、貨幣、銀行など国家財政の確立に尽力した。しかし硬直した官界の体制を見限り、1873(明治6)年に実業界に転身し、第一国立銀行などの頭取に就任、以後500以上の会社の設立に関与し、日本の近代資本主義の基となった。

その事業は私利私欲になりがちな経済活動を「われも富み、人も富み、しかして国家の進歩発達を助ける富にして初めて真の富と言え」と経済と論語を結び付けた「道德経済合一説」を提唱し筋を貫いた。また、孤児院など子供や老人のための社会貢献、「青い目の人形」で知られるアメリカと日本の人形交換など幅広い国際交流を行った。

### ■ 渋沢栄一と富岡製糸場



1870(明治3)年、官営富岡製糸場設置主任となり、建設計画を推進した。伊藤博文と渋沢栄一は富国強兵策の一環としてお雇い外国人のフランス人バスチャンに製糸場工場の主要建造物の設計、ブリューナに器械購入と技術者採用などを依頼した。そして渋沢の従兄で学問の師でもあった尾高惇忠が日本側の責任者となって建築資材の調達や工女の募集に当たり、初代場長を務めた。

官営富岡製糸場は、その後 ①1893(明治26)年に三井家に払い下げ ②1902(明治35)年に原合名会社に譲渡 ③1939(昭和14)

年に片倉製糸紡績株式会社に合併されることになり、片倉富岡製糸場と改称、1946(昭和21)年に片倉工業株式会社富岡工場となった。「1974(昭和49)年に富岡製糸場で最高の生産量を達成したが、1987(昭和62)年に操業停止となった。

2005(平成17)年、工場建物および機械設備などが国史跡に登録されたのに伴い富岡市に寄贈、翌年工場の土地を富岡市に売却した。片倉工業は停止当時、日本で最高の技術水準を持つ工場を“貸さない、売らない、壊さない”の方針で年間1億円の維持費を負担し設備の保存を続けた。2007(平成19)

年に世界遺産暫定一覧表に追加記載され、2014(平成26)年に世界遺産に登録された。



富岡製糸場 正門